

勝田高校図書館だより

平成30年度 第12号

平成31年3月22日発行



三月のうた (和歌・小説)

冒頭でも述べましたように、桜の便りが届き、心浮き立つ季節になりました。今回は、数え切れない「桜」を描いた作品の中から、代表作をほんの少しだけ紹介したいと思います。

今年も桜の便りが気になる季節になりました。

今年度の授業を終え、次に皆さんの多くが顔を揃えるのは4月の離任式ですね。3年生を送った卒業式からまだ3週間しか経っていないのに、学校は新年度の準備に忙しく、様変わりをしているように感じます。皆さんの心も、来年度のクラスや授業がどうなるかという心配や期待で占められていることでしょうか。2年生はいよいよ進路を決める緊張感を感じ始めているかも知れません。

春は、別れの季節であり、始まりの季節です。変化に向き合う季節でもあります。喜びと悲しみ、期待と不安、そういった二極化された思いばかりでなく、何となく落ち着かなかつたり、切なかつたり、些細なことにも心が揺れる季節ではないでしょうか。しかし、(2年生の皆さんには1年前にもこの場に記しましたが、)その心の揺れから逃げないで、むしろ自ら向き合う心を持ってほしいと思います。私達は、一つの価値観だけでは理解しきれない世界を生きています。矛盾を突きつけられ、葛藤し、けれども節目になれば一つを選択し、その連続が一人一人の生き方のようなものを形作っていきます。望んでその道を歩くばかりでなく、消極的に選ぶ道、また時には望まなくても歩まざるを得ない道に出くわすときもあります。しかし、望まなかった道故に、思いもよらなかった美しい風景に出会うことも、暖かい人の思いに触れることもあるはずですよ。

本の世界は無限に広がっています。見知らぬ世界にも、様々な人の生き様にも出会えます。皆さんの目を開き、皆さんの心を支える世界と、これからも本を通じて出会う機会が少しでもありますよう願っています。

渚院にて桜をよめる 在原業平朝臣
世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
(もしこの世の中に全く桜がなかったなら、春を迎えて、人の心はどんなにかのどかであるだろうに。)



桜の花の散るをよめる 紀友則
ひさかたの光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ
(日の光がのどかに照っている春の日なのに、どうして落ち着いた心もなく桜の花は散るのだろうか。)

まずは『古今和歌集』『春歌』から二首ご紹介しました。共に、皆さんも耳にしたことがあるであろう有名な歌です。一首目は、「いつそのことこの世から桜がなくなってしまうのどかな春を迎えられるのに」と、逆説的に人々の桜に対する愛着や心惹かれる思いの強さを表現しています。また二首目は、「静心なく花の散る」姿を目の前にし、その原因を推量する形で、明るい光が輝く春の日に散り急ぐ桜の花のはかなさを惜しむ思いを表現しています。作者の心には、何か切なさや寂しさ、憂いが潜んでいるのかも知れません。

「桜の樹の下には^{したい}屍体が埋まっている！
これは信じていいことなんだよ。なぜって、桜の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことじゃないか。」 (梶井基次郎『桜の樹の下には』)

「……この山に一人の山賊が住み始めましたが、この山賊はずいぶんむごたらしい男で、街道へでて情容赦なく着物をはぎ人の命も断ちましたが、こんな男でも桜の花の下へくるとやっぱり怖くなって気が変になりました。……桜の森の満開の下の秘密は誰にも今も分かりません。あるいは『孤独』というものであったかもしれませんが。なぜなら、男はもはや孤独を怖れる必要がなかったのです。彼自らが孤独自体でありました。」 (坂口安吾『桜の森の満開の下』)

上の和歌が詠まれてから千年の時が過ぎ、近代の二人の作家が描いた「桜」です。彼らが桜の花に見たものは生か死か、絶望か陶酔か。残酷な美か魔性の真実か。人の心を惑わし物思いへと導くのは、こぼれんばかりに咲き誇る姿かそのはかなさかその両方か、それは分かりません。皆さんは桜の花に何を見るのでしょうか。理性と感性は、対立するものではないのかも知れません。また人間とは矛盾した存在であり、だからこそ永遠に真相を追い求める対象となるのでしょうか。それらを語る多くの言葉と出会い、多くの思いに触れられることは生きる上で幸いだと思えます。

今年度も一年間読んでくださってありがとうございました。これから先皆さんが迎えるすべての春が、小さくとも期待を秘めた始まりと再生の季節であることを祈っています。

★図書館からのお知らせです。★

◎年度末の図書の点検や処理のため、春休み中図書館は休館となります。来年度の開館や図書館の利用情報は4月に改めてお知らせ致します。

○4月からも、展示や特集を楽しみにお待ちください。

○来年度も、意欲のある図書委員をお待ちしています。興味がある人は是非新クラスで希望してくださいね。

*今年度後半は、「学級文庫」を選んで各クラスにコーナーを設けたり(1年)、「気になる記事2018」を一人一人まとめて掲示したり(2年)、委員の話し合いによって実現した企画がありました。来年度も、図書委員自身が考えたり、働きかけてみたいと思った企画を皆さんにお届けする機会を設けたいと思います。また、蔵書点検等「本」に携わる委員会活動も増やしていく予定です。多くの本に触れたい人も、企画・広報に興味がある人も、図書館を居場所の一つにしてみませんか。

